

武藤一羊のあらまし

1931年東京生まれ。3歳から小学校（国民学校）5年まで「満州」で育つ。1950年東京大学入学、学生運動に参加、日本共産党にはいり、1952年、単独講和・安保調印反対闘争で退学処分、その後全学連で活動、1954年3・14事件（吉川文書参照）で逮捕、釈放後青年運動で活動、1955年「国際通信」記者、1957—60年原水禁運動の国際部専従、1960—64年ジャパン・プレス社勤務のあと、1964年共産党除名、共産主義労働者党結成に参加し、中央委員をつとめた。原水協では第三回から第五回までの原水爆禁止世界大会の国際的組織活動に参加した。

1965年ベトナム戦争本格化のなかで結成されたベ平連運動に加わって活動、反戦、国際連帯活動、脱走兵援助活動などにたずさわる。そのなかで1968年英文雑誌「AMPO」創刊、1973年、鶴見良行、北沢洋子、加地永都子とともにアジア太平洋資料センター（PARC）を設立、アジアと日本の民衆運動の結び付きをつくる活動を続ける。1977年からACFOD（発展についてのアジア文化フォーラム）などアジアのNGOネットワークで活動、1989年、PARCの呼びかけで大規模な国際プログラム「ピープルズ・プラン 21世紀」（PP21）が組織され、列島を縦断して開かれた15を越える国際会議の水俣での総括会議で、水俣宣言を採択するが、この行事の全国コーディネーターをつとめ、その後この国際ネットワークの調整委員を務めた。PP21は、1992年タイ、1996年南アジア（総括集会はカトマンズ）で開催され、2002年PP21が組織を閉じたが、それまで世話役をつとめた。1997年PARC共同代表を辞して、1998年、花崎阜平とともにピープルズ・プラン研究所を設立、共同代表をへて、現在はその運営委員、季刊誌「ピープルズ・プラン」編集委員。PP研の発意で、武藤が理事であったバンコクのフォーカス・オン・ザ・グローバル・サウス（Focus on the Global South）などとともに、2000年沖縄サミットの対抗行事として、浦添で「民衆の安全保障国際フォーラム」を開催、2002年ブッシュの反テロ戦争にアジアから声をあげようと、フォーカスおよびアジアの活動家・研究者集団であるARENAとともに、マニラで「アジア平和連合」（APA）を結成。その推進役をつとめた。2004年ムンバイで開かれた世界社会フォーラムから始まったグローバルな反基地の流のなかで、2007年のエクアドルでの世界反外国基地大会の開催に向けて、APA ジャパンがアジア太平洋の反基地運動のワークショップを東京で開催するイニシャチブをとった。

現在ARENAのフェロー。1983—2000年ニューヨーク州立大学（ビンガムトン）社会学部教員としてほぼ毎年2カ月を米国ですごした。1995年に台湾の陳興光が始めたInter-Asia Cultural Studiesの動きに参加、最初は編集委員、いまはそのアドバイザー。

現在はピープルズ・プラン研究所を中心に活動をつづけている。

著書に、「主体と戦線」（1967年、合同出版）、「学生運動」（1969年、筑摩書房）、「支配的構造の批判」（1970、筑摩書房）、「根拠地と文化」（1975、田畑書店）、「日本国家の仮面

をはがす」(1984年、社会評論社)、「政治的創造力の復権」(1988年、御茶ノ水書房)、「ヴィジョンと現実」(1998年、インパクト出版会)、「〔戦後日本国家〕という問題」(1999年、れんが書房)、「帝国の支配／民衆の連合」(2003年、社会評論社)、「アメリカ帝国と戦後日本国家の解体」(2006年、社会評論社)、「潜在的核保有と戦後国家—フクシマ地点からの総括」(2011年、社会評論社)など。訳書に、トロツキー「スターリン」(佐野健治との共訳、1967年、合同出版)、ハワード・ジン「反権力の世代」(1967年 合同出版)、エルドリッジ・クリーバー「氷の上の魂」(1968年、合同出版)、グレアム・ハンコック「援助貴族は貧困に巣食う」(1992年、朝日新聞社)、共同監訳「世界社会フォーラム—帝国への挑戦」(2005年作品社)など。

以上